



未来へ

埼玉県立川越高等学校
進路通信「未来へ」1号
平成28年4月28日
発行 進路指導部

改めて、昨年度の入試結果をしてみる

◎ 過去3年間の主要大学入試結果（合格者数）

国公立大学	2016春	2015春	2014春
	合計(現役)	合計(現役)	合計(現役)
北海道大	8 (2)	7 (5)	13 (3)
東北大	6 (3)	17 (7)	7 (4)
筑波大	9 (7)	13 (6)	12 (8)
埼玉大	19 (15)	18 (16)	19 (13)
千葉大	4 (3)	6 (3)	7 (5)
東京大	6 (4)	6 (3)	5 (1)
東京工業大	6 (3)	9 (6)	8 (5)
一橋大	12 (6)	6 (5)	5 (2)
東京農工大	15 (13)	16 (8)	17 (12)
東京学芸大	7 (4)	6 (5)	8 (3)
東京芸術大			1
東京外国語大	3 (1)	2 (2)	2 (2)
東京海洋大	4 (4)	4 (2)	1
電気通信大	4 (2)	1 (1)	3
横浜国立大	7 (4)	3 (2)	7 (6)
新潟大	3 (1)	1 (1)	1 (1)
京都大	3	1	1 (1)
大阪大		1 (1)	
九州大			3 (2)
首都大学東京	8 (4)	6 (5)	6 (4)
横浜市立大		1	2 (2)
国公立医学部	4	9 (1)	4 (1)
その他の大学	25 (9)	19 (7)	15 (7)
合計	153 (85)	152 (86)	145 (80)

私立大学	2016春	2015春	2014春
	合計(現役)	合計(現役)	合計(現役)
早稲田大	121 (74)	110 (65)	124 (89)
慶應義塾大	38 (18)	35 (22)	35 (17)
上智大	31 (20)	22 (13)	34 (19)
東京理科大	92 (51)	120 (64)	98 (45)
明治大	144 (94)	162 (103)	145 (86)
青山学院大	20 (12)	22 (16)	13 (8)
立教大	74 (39)	52 (29)	83 (47)
中央大	58 (27)	50 (21)	64 (27)
法政大	54 (30)	74 (35)	88 (48)
学習院大	18 (7)	13 (3)	24 (8)
芝浦工業大	73 (37)	69 (26)	72 (35)
私立医学部 ※自治医大含む	9 (3)	12 (2)	4
その他の大学	283 (122)	335 (185)	288 (115)
合計	1015 (534)	1076 (584)	1072 (544)



改めて、昨年度（2016年春）の入試結果を見てみましょう。昨年度入試から、完全な新課程入試となりました（一昨年度は数学・理科のみ新課程を先行実施）。この新教育課程は、これまで長く続いてきた、内容を削減する方向での教育課程の変更（いわゆる“ゆとり教育”）とは異なり、内容を増加させる方向での変更です。つまり、それまでよりも（特に理科・数学において）皆さんの学習内容は増えることになります。それに対応するためには当然、早くからの対応が必要になります。

早くからの対応が必要ということになると、余裕をもってカリキュラムを消化できる6年生の中高一貫校が有利になるのでは、という予測が事前がありました。一昨年と昨年の結果を全国的に見てみると、まさにその通り、中高一貫校の私立高校の躍進が目立ちました（昨年度は埼玉県でもついに東大合格者数で公立高校ではなく、中高一貫校の私立高校がトップに立ったのは、記憶に新しいところです）。全国的に公立高校が苦しむ中で、川越高校の入試結果の数字はどう見えるでしょう。

結論から言うと、川越高校はかなり健闘したと言えるでしょう。国公立大の合格者の割合は増加し（一昨年は10クラス、昨年は9クラス）、早稲田大の合格者数も県内の公立では2位となっています。特に文系の健闘が目立ち、東大の現役合格者が2名（2名とも文科I類）、一橋大の現役合格者が6名（法1名、経済3名、社会学2名）となりました。これは、早くからの進路指導、特に適切な文理選択（数学が苦手だから文系、など安易に選択しない）と目標を下げさせない指導の結果であるでしょう。加えて、二次試験対策を早くから取り組んでいた生徒が多く、センター試験前から（早い生徒は夏明けから）記述問題の添削を先生方に頼みに来る生徒が多かったことも特徴的でした。

文系が健闘した一方で、理系の苦しさも目立ちました。先に述べたように、理科と数学で内容が増加したことが響いており、全国的に見ても、理系では時間をかけられる中高一貫校が特に有利な状況となっています。川越高校でも、時間的・カリキュラム的な制約がある中で、理系の先生方はベストを尽くされました。それでも、“最後に伸びる”と伝統的に言われてきた川越高校生の中で、伸びきらないまま受験を迎えてしまう生徒が多かったことを見ると、やはり、今まで以上に早くから（大学受験へのスタートは高校入学時から始まっています）、まとまった時間をかけた学習を（理系科目はスキ間時間だけではどうしても不十分です）、一人一人が毎日の学習で実行していくことがどうしても必要になってくるでしょう。

こういった進路の話の話を聞いていると、「自分はどこに受かるのかな…」と不安になる人も多いかもしれませんが。ただ、忘れてほしくないのは、“どこに受かるのか”が大切なのではなく、“どこに行きたいのか”が大切だということです。始業式でも話しましたが、昨年度、難関大学に合格した先輩たちは、必ずしも入学時から成績がトップだったわけではありません（東大に受かった4名の中に最初から学年トップはいませんでしたし、入学当初のスタサポでは3ケタ順位であったのに一橋大に受かった先輩もいます）。ただ、難関大学へ受かった先輩たちに共通して言えるのは、早くから志望校を決め、そこに向かって日々の努力を惜しまなかったということです。これを読むみなさん全員に、志望校へ行くチャンスはあります。あとはそれを自分で活かすかどうかです。まずはこの1年、頑張っていきましょう！！

まずは学習習慣の確立を！！

では、どのように頑張ればいいのか、という話になります。年度初めのテンションが高い時期に大切なのは、毎日の学習習慣を構築することです。ここで自分に合った学習習慣を構築できれば、この1年間その流れで学習を上手に進めていくことができるでしょう。学習習慣を確立するためのポイントをいくつか挙げておきたいと思います

(1) 毎日の絶対的な学習時間を確保する

部活や行事などで忙しい毎日ですが、日々の学習なしでは学力向上は望めません。スキ間時間（電車などの通学時間、学校での休み時間など）を活用するのはもちろんですが、特に数学や理科の問題にじっくり取り組むために、まとまった時間（最低でも1時間以上）を作り出してください。食事の前、寝る前、朝早くなど、生活スタイルによって時間をとれるタイミングは違うと思いますが、毎日固定すると続けやすくなります。毎日の学習時間の総合計も、先ごろ話題になった神奈川の某公立高校のように、平日：(学年+2)時間、休日：(学年+4)時間と言いたいところですが（難関大志望者はこのくらいは当然です）、昨年度の皆さんの学習時間を見ると、まずは平日：(学年+1)時間、休日：(学年+3)時間を目指してください。余談ですが、昨年度東大と医学部に合格した先輩は、それぞれ夏休みに合計500時間（1日平均10時間以上）やっていました。時間をしっかりかけた学習をしましょう。あと、スマホは1日30分まで！！

(2) 目標を高く持つ

入試結果のところでも述べましたが、“行きたい大学”を高く掲げて下さい。“東大とか自分が目指しているのかな…”と言う人もたまにいますが、川越高校に通っている以上、どの大学も目指す資格があります。自分がどこまで伸びるのかにチャレンジするのも、大学受験の大きな意義のひとつです。“この大学を志望しているんだ！！”と臆せずに言ってみてください。同じような仲間がきっといるはずですよ。そういう仲間をお互いに見つけて、時には励ましあいながら切磋琢磨してください。我々も皆さんの志望校への頑張りを全力でサポートします。

文責：水村晃輔（進路指導主任）